第62回イスパニア会例会講演要旨（令和5年12月3日）

ノーキャプション漫画は『リンガフランカ』

講師：山井 教雄（1974年卒、漫画家）

友人宅で東京外国語大学卒業者名簿を暇にあかせて調べたところ、立派なキャリアの方、ユニークな職業の方は大勢いましたが、「職業漫画家」は私一人でした。

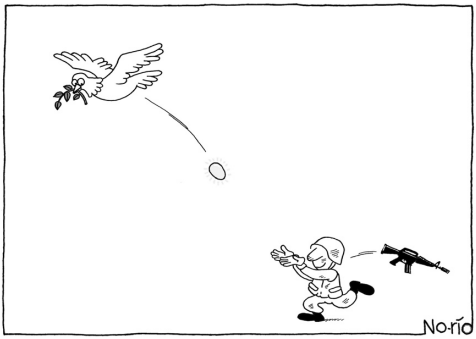
商売柄、身の回りに外語卒の方は全然おらず、孤独をかこっていましたが、この度、イスパニア会に講師として呼んでいただき、やっと外語仲間に入れてもらえたという思いがしました。

外語を卒業すると、広告代理店でTVCFの企画・監督をしていました。その後、ソルボンヌ大学と提携して「日本語ヴィデオ・メソッド」を企画・制作すると、「これを使って実際に教えてみたら」と日本語科講師としてひっぱられました。TVCF風にユーモア・ギャグ満載のヴィデオで、教室中笑いが絶えません。しかし、さすがユムールの国フランス、大学側も「笑いによる学習効果」を認め、このメソッドを論文代わりとして大学博士号を授与してくれました。

授業中は、難しい言葉や日本文化の説明に、サラッと黒板に絵を描いていましたが、学生たちからは「先生、漫画家になった方が儲かりますよ」などと冗談めかして言われていました。その女学生の一人が卒業して、『Courrier international（ル・モンド傘下発行部数30万部の国際政治・経済週刊誌）』の立ち上げに加わり、「先生、クーリエにも描いてください」ということになりました。

しばらくして、朝日新聞が『AERA』という『Time』や『Newsweek』風の全く新しい週刊誌を作るので、手垢のついていない漫画家が欲しいと、創刊準備から呼ばれました。

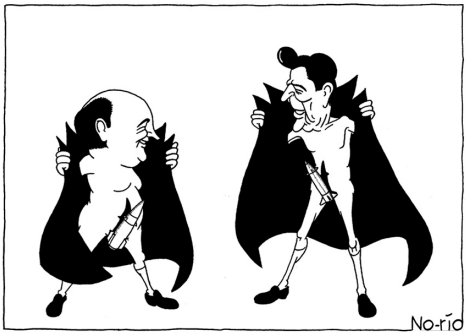
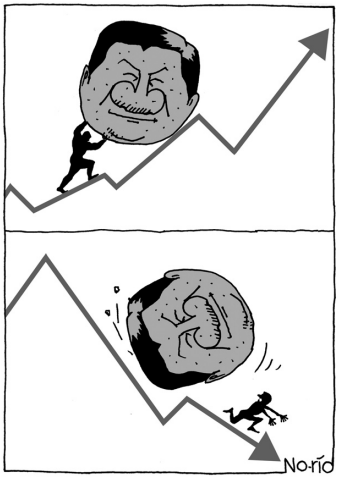
こうして日仏両国週刊誌のレギュラー漫画家となり、また私の漫画はよく欧米の新聞にも転載されるので、言葉による説明がない「ノーキャプション漫画」を描くように心がけました。しかし、自分の漫画にタイトルやセリフなど、言葉による説明を全くつけないというのは、勇気がいるものです。読



者の知識と教養を全面的に信頼して描くのですが、これが各国の文化・習慣・教養の差を乗り越えて驚くほど通じるのです。まさしく「ノーキャプション漫画」は「リンガフランカ」なのです。

仏 新聞政治漫画の始まりはフランス革命時、「dessin de press（新聞絵）」と呼ばれていました。風刺の対象は「王、貴族、宗教（カトリック）」でしたから、今でもフランス漫画の宗教批判は激しいものがあります。

2015 年、盛んにイスラム、モハメッドを批判していた漫画週刊誌『シャルリー・エブド』で 2 人のイスラム・テロリストに編集会議が襲われ、私の友人漫画家 4 人を含む 12 人が射殺されます。

このテロに対し、オルランド仏大統領、EU 首脳をはじめ、パリで 120 万人、フランス全土で 370 万人が抗議のデモを繰り広げました。

このフランス国民の圧倒的支持にもかかわらず、『NY タイムズ』が漫画の掲載をやめる、ダボス会議が漫画家の招聘をやめるなど、イスラムの圧力はボディブローのように漫画界に効いてきました。またインターネットメディアに押され、各国で新聞、週刊誌などの紙媒体の力が弱まりました。このまま紙媒体と命運を共にするのか、新たな道を探すのか、一コマ政治漫画の正念場です。